

## 追悼 『店村新次先生』

進藤勝美

聖隷学園聖泉短期大学教授 店村新次先生は、平成3年8月20日逝去されました。享年72歳でした。先生は聖泉短大が開設された昭和60年4月1日に、フランス語担当の専任教授として着任され、直ちに「一般教育」組織の科長を兼任された。聖泉短大では、「英語科」科長と「商経科」科長を加えて三人の科長が任命され、他に「教務」部長と、「広報就職」部長が加わり、理事長・学長のもとで、「役員会」ないし「部科長会」を組織して短大全体の運営に当たることになっていた。

開学当時の教員名簿によると、専任教員は「英語科」八名、「商経科」九名、「一般教育」九名に学長先生を加えて総員二七名でした。「一般教育」は独立の「科」ではないが、「教員組織」としては当初から独立性が与えられ、今日に至っている。この「教員組織」を全学的視点に立って統轄するのが店村先生の任務となったわけである。

「一般教育科目」には、「キリスト教」の分野を筆頭に、「人文」「社会」「自然」の諸分野と、「外国語科目」と「保険体育科目」が含まれており、これらの各分野にどのような授業科目を選定し、それらをどの先生に担当してもらうかを決定しなければならない。もちろん、専任の教員だけでは間に合いません。非常勤講師を探さねばなりません。こうしたことは、「英語」科長でも「商経」科長でも同様だが、とくに一般教育科目では、その分野が多岐に亘っており、科長はもとより、一般教育の専任の教員の方でも、専攻分野が掛け離れておって、適任の非常勤の先生を探しかねるというケースもでてきます。店村先生が随分苦労されて、「自然科学概論」や「保健体育」、「中国語」などの非常勤を探

しておられたのをよく承知している。

## 二

「一般教育」について科長としての店村先生が心配されたのは、18歳人口が1992年をピークに漸減し、志願者が減少して定員確保が困難になるのではないかと、そのような事態に対して「一般教育」はどのような将来計画を持つべきかということであった。店村先生は、できれば「一般教育」に所属する専任の先生方の専攻分野を生かしていけるような新しい「科」の新設はできないだろうかと考えておられたようだった。事実東海地区には、「教養科」を設けて成功している短大が数校あるといわれており、店村先生自身も視察に訪れたということだったが、「役員会」で具体策を提案するまでには至らなかった。幸い昨年度は、「商経科」の定員五〇名増と、校舎の増築、情報教育施設の充実などが実現し、一歩前進することができたのは幸いであった。

店村先生が「一般教育」の科長として心配して来られたもう一つの問題は、専任教員とくに年配の助教授の方の教授昇進の件であった。この件に関連して、昨年度末に理事長が中心となって各科別に「役員会」のメンバーと人事について話し合いをする会合がもたれた。「一般教育」の場合は、店村先生に引続いて科長をお願いし、昇進人事も積極的に取り上げようということになった。そして当面は、二名の助教授の教授昇進を、平成3年の10月までに決定することが承認された。事実この案は、9月24日の「人事委員会」及び「教授会」で可決され、店村先生の念願を果たすことができたが、先生は8月20日に永眠され、このことをお報せすることができなかった。かえすがえすも残念なことだった。

## 三

店村先生はフランスの小説家マルタン・デュ・ガール（大河小説「チボー家の人々」で有名、1937年ノーベル文学賞受賞）の研究者として有名であり、「ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究」なる主著の他、論文、翻訳など多数あり、さらに、1981年11月には、「マルタン・デュ・ガール生誕百年記念国際学会がパリで開催されたとき、Roger Martin du Gard au Japon と題する発表（口頭）を行った」と個人調書に記してある。店村先生は、日本の学会を代表するマルタン・デュ・ガールの研究者としてこの国際学会に招かれたのである。

先生はフランス語、フランス文学のすぐれた研究者であったが、それだけでなく、その研究はヨーロッパ文学全般に亘っており、同志社大学において、「ヨーロッパ文学」の講義を担当されたし、本学の「英語科」でも同名の授業科目を講じられた。1989年4月に出版された「ヨーロッパ文学の主潮—中世よりロマン主義まで—」なる著書は、テキスト用の小冊子としてまとめられたものだが、私のような門外漢が読ませていただいても、ヨーロッパ文学に関する先生の豊かな学殖に圧倒される思いであった。

先生はヨーロッパの文学だけでなく、古典音楽にも精通され、ベートーヴェン・モーツァルト・チャイコフスキー・ドビッシー・ショパンなどの著名な大作曲家についての訳書シリーズを監修され、先生自身も六冊の訳書を発行しておられるし、本学の「地域問題研究所」主催の土曜講座でも「西洋音楽史」について講ぜられ、大変好評でした。

#### 四

また先生には、教員の研究会の実施や、学会誌「人文・社会科学論集」の編集・発行などを担当する「聖泉人文・社会学会」の責任者としても、大変ゆきとどいた御配慮をいただいたし、さらに学生の調査研究などの成果も論集として印刷し発表できる「FONS（フォンス）」という小

冊子も先生のアイデアと御尽力によって年一号づつ発行できるようになり、第5号が平成3年2月に発行されました。原稿集めがなかなか大変のようだが、発表したいという意欲のある学生もかなりおるようなので、先生のアイデアを長く引き継いでゆきたいものだと考えている。

先生は学会を中心とした研究活動の推進だけでなく、プライベートな研究会も、同志を集めて続けておられた。「両大戦間研究会」という、大変幅の広い領域に亘る研究会で、私にも聲をかけてくれましたが、専攻分野が離れているので失礼していた。ところが、61年末か62年の初め頃かと思うが、店村先生から、上記研究会でケインズ (John Maynard Keynes) が問題になり、是非私にケインズについて話してもらおうということになったので頼むといわれた。ケインズ革命とかケインズ主義とか称される高名な経済学者なので、私も名前は承知しており、何冊かのケインズ研究書はもっていたが、研究報告などはとても及びもつかぬことだとお断りした。ところがなかなか諦めてくれず、とうとう引き受ける羽目になって、「ケインズ管見」という表題で二回に分けて報告した。

いまその時のノートを取り出してみると、四苦八苦してなんとか間に合わせたことが想起され、大変懐かしい。おかげで良い勉強をさせてもらったと感謝している。

## 五

店村先生は講義や演習では、かなりきびしい姿勢で学生に対しておられたようである。聖泉短大の図書館で、活動の一環として発行している『友よ』という学園情報誌がある。その1990年発行の第五号に先生が執筆された「基礎演習クラスでの努力」のなかで、先生の姿勢がはっきり示されているように思った。

一回生の必修科目である基礎演習はなかなか扱いにくい科目のようで

あり、学科会議でもよく話題になる。店村先生はずっと基礎演習を担当してこられた。そのなかで当初はお得意の「西洋音楽史」を取り上げておられたようだが、なかなかついてこれない学生もおるので、「時にスポーツをはさんだり、論文を書かせてそれを私が読むことにより、学生の発表にかえる試みをしてみるつもりだ」と、平成3年度の商経科一回生の基礎演習の指導方針について述べておられる。

一回生の演習は、高校でやってきたことの繰り返しでは学生がついて来ないし、だからといって大学生らしいテーマで、しかもそう難解でなく、興味のもちそうなテキストを見付けるのは容易なことでない。第一、新聞をろくに読んでいない学生が多く、私も「経営学総論」の講義で閉口した経験がある。店村先生はこう述べておられる。

「作文という作業には、例年学生諸君はかなり真面目に取り組んでくれたと思う。ただし各自が自由にえらぶ論題について、いくつかの特殊な禁止事項を設けた。まず、アルバイトについての話しは一切やめること。高校生時代の思い出だの、本学に入ってから感想など……要するに、自分の身にへばりついている物事についての話はもう結構、一切取り上げないこと。そうでなくて、なんでもよいから外界の事象に目をこらして、観察し、分析し、つとめて文献を調べてそれを援用することにより、たとえ拙くとも、自らの客観的立場からの論をうちたてること、この訓練を私は要求する。……それはそうとして、聴きたいと思っていない人たちに無理に音楽を聴かせてどうだというのだろう。……だが私は考える。私が聴かせたいのは、いまそっぽをむいている無関心な若者たちではない。何十年か後に本当の大人になったときのこの人たちなのだ。教育とはそうしたもののだから……。」

「教育は学生・生徒の心に種を蒔くことではないか」と思うことがある。しかし、店村先生も述べておられるように、各人の身にへばりついている関心事や話題に妨げられて、なかなか根付いてくれない。西洋音楽史やヨーロッパ文学を聴講して、これは興味がある、もっとやってみ

たいと思う人が何名かはおるだろう。かなりの量、たとえば原稿用紙二〇枚以上の論文やリポートの提出を課せられて、やっと身にへばりついたものを払いのけてやらねばと思う人もおるだろう。なんか種蒔きになるようなきっかけをつくって、辛抱強くそれを根付かせてやるのが店村先生の意図であったろうし、そのためのきびしさでもあったろうと推量している次第である。

## 六

店村先生と初めてお目にかかったのは、開学前の昭和60年1月15日の「専任教員初顔合せ」の会のときだった。長谷川理事長と伊藤学長の挨拶があって、続いて各人が自己紹介を行った。以来6年有余、本当に皆でよくやってきました。志願者も増え、就職も大変好調です。残念なのは、開学以来一緒に頑張ってきたお二人の専任を病魔で喪ったことです。平成元年9月に商経科の作原猛志先生が、そしてこの度は、「一般教育」科長の店村新次先生が不帰の客になりました。誠に痛恨の至りでございます。

店村先生は聖泉短大に着任されて3年目の昭和62年の6月半ばに、腸の病いで京都の警察病院に入院し手術された。術後の経過はきわめて良好で、わたくしが7月末にお見舞にうかがったときは、お顔の色もよく大変お元気でした。その後退院されて自宅で養生の上、10月6日から出校され、その日は教授会に出席されてご挨拶をなさいました。そしてその後は平常通り出校、授業や会議にも欠かさず出席、平成元年度のフレッシュマン・キャンプ（合歓の郷）にも元気で参加された。夏季休暇を利用してフランスに行ってきたのもこの年だったように思います。

平成2年度は、前半はお元気でしたが、後半は体調をくずされ、1月には医師の診断書を持参されて、理事長に退職を申し出られた。学長と私も理事長室によばれて話し合いに参加した。理事長はせめてもう一年

「一般教育」科長をやって欲しいと強く慰留された。店村先生も講義二齣を非常勤にやっていただくことを条件に引き受けられた。しかし、先生の体調は快方に向かわず、「4月の初め、突然劇しい発作におそわれ、急遽入院し、以後闘病に明け暮れてしまった」と奥様の代筆でお手紙をいただいたのが5月の半ばでした。しかし、わたくしが6月12日お見舞にうかがったときは、随分お元気になられて、今月中に退院できるかもしれないと申しておられ、喜んで帰ってきました。だが、残念ながら再起はできませんでした。本当に惜しい方を失ったと慨嘆に堪えません。先生のご冥福を心からお祈りして筆を擱きます。